

労働映画百選通信 No.10 2016.08

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

6月11日発表！ 日本の労働映画百選 <http://hatarakubunka.net/>

『明治の日本』(1897)から『下町ロケット』(2015)まで！ “働く姿”を描いた百本をセレクト

映画は日本の仕事と暮らし、働く人たちの悩みと希望、働くことの意義と喜びをどのように描いてきたのか。働くことの今とこれからについて考えるために、一世紀余の映画史の中から百本を選びました。

特定非営利活動法人 働く文化ネット・労働映画百選 選考委員会

明治の日本/川崎三菱労働争議/何が彼女をそうさせたか/第十二回東京メーデー/隅田川/生れてはみたけれど
有りがたうさん/戦ふ兵隊/煉瓦女工/機関車C57/或る保姆の記録/わたし達はこんなに働いてゐる/轟進/炭坑
われら電気労働者/海に生きる/白雪先生と子供たち/どっこい生きてる/生きる/おかあさん/1952年メーデー
女ひとり大地を行く/蟹工船/京浜労働者/太陽のない街/立ち上がる女子労働者/ここに泉あり/赤線地帯
喜びも悲しみも幾歳月/ボタ山の絵日記/雪と闘う機関車/にあんちゃん/海に築く製鉄所/刈り切り唄/年輪の秘密
大いなる旅路/裸の島/1960年6月 安保への怒り/西陣/キューポラのある街/その場所に女ありて/ある機関助手
ドキュメント 路上/68の車輪/こころの山脈/若者たち/農業禍/和賀郡和賀町/黒部の太陽
太陽の王子 ホルスの大冒険/男はつらいよ/シブヤードの青春/家族/戦争と人間 三部作/友子儀式/日本の稲作
詩人の生涯/トラック野郎 御意見無用/どっこい！人間節/日没の印象/男たちの旅路/日本の戦後
あゝ野麦峠/ザ・サカナマン/速雷/海峡/原発はいま/魚影の群れ/ガン・ホー/マルサの女/母さんが死んだ
魔女の宅急便/あーす/月はどっちに出ている/踊る大捜査線/鯨捕りの海/鉄道員 ぽっぽや
人らしく生きよう 国労冬物語/こんぼんは/県庁の星/フラガール/三池 終わらない炭鉱の物語/ハゲタカ
ハケンの品格/おくりびと/フツウの仕事がしたい/ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない
任侠ヘルパー/孤高のメス/昭和の家事/サウダーチ/舟を編む/ある精肉店のはなし/ダンダリン 労働基準監督官
WOOD JOB!/紙の月/夢は牛のお医者さん/昼めし旅/種まく旅人 くにうみの郷/下町ロケット

【上映情報】労働映画列島！7～8月 ※《労働映画列島》で検索！ <http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00160703>

◎新作ロードショー

あなた、その川を渡らないで 《7月30日(土)から 東京 シネスイッチ銀座ほかで公開》

98歳のおじさんと89歳のおばあさん、結婚76年目にして仲むつまじく暮らす老夫婦の日々を記録したドキュメンタリー。
(2014年 韓国 監督/チン・モヨン) <http://anata-river.com>

奇跡の教室 受け継ぐ者たちへ 《8月6日(土)から 東京 恵比寿ガーデンシネマほかで公開》

パリ郊外の、貧困層が多く通う高校に赴任したベテラン歴史教師と、劣等生たちとの交流を描くヒューマンドラマ。
(2014年 フランス 監督/マリー＝カスティエユ・マンシヨン＝シャルル) <http://kisekinokyoshitsu.jp>

五島のトラさん 《6月18日(土)から ユナイテッド・シネマ長崎ほか、8月6日(土)から 東京 ポレポレ東中野で公開》

テレビ長崎が製作したドキュメンタリー。五島列島でうどんの製麺業と天然塩の製造をしているトラさん一家9人の暮らしを、22年にわたって継続取材。(2016年 日本 監督/大浦勝) <http://www.ktn.co.jp/torasan/>

◎名画座・特集上映

【東京 京橋フィルムセンター】8/9～28「ドキュメンタリー作家 羽田澄子」…村の婦人学級/女たちの証言/他

【東京 シネマヴェール渋谷】7/30～9/2「映画史上の名作15」…ドクター・ジャック/南部の人/サマー・ストック/他

【東京 神保町シアター】8/6～26「鉄道映画コレクション」…家族/喜劇 大安旅行/ある機関助手/指導物語/他

【東京 ラピュタ阿佐ヶ谷】8/14～10/15「稀代のエンターテイナー！フランキー太陽傳」…ぶっつけ本番/地方記者/他

【北海道 千歳市民文化センター】8/20・21「日本映画祭 in ちとせ」…稲妻/伊豆の踊子(1963)/華岡青洲の妻/他

【青森県田子町 タブコピアンプラザホール】8/27「第3回 相米慎二監督映画祭り」…魚影の群れ(1983)

【釜石PIT/ほか】8/26～28「釜石でっぴん映画祭」…最高の人生の見つけ方/かもめ食堂/フラガール/他

【大阪 九条 シネ・ヌーヴォ】7/23～8/19「映画監督 鈴木英夫の全貌」…大番頭小番頭/その場所に女ありて/他

【大阪 阿倍野区民センター】8/26～28「ヒューマンドキュメンタリー映画祭阿倍野2016」…被ばく牛と生きる/他

【シネマ神戸】8/13～19レヴェナント 蘇えりし者/チリ33人 希望の軌跡(2本立)

【山口情報芸術センター】8/12～14「真夏の夜の星空上映会」…シェフ 三つ星フードトラック始めました/他

【鳥栖市民文化会館】8/20・21「川島雄三と岡本喜八」…洲崎パラダイス/雁の寺/日本のいちばん長い日/他

【湯布院公民館/他】8/24～28「第41回 湯布院映画祭」…お父さんのバックドロップ/種まく旅人 夢のつぎ木/他

【レポート】「日本の労働映画百選」記念シンポジウムと映画会（その2）

6月11日(土)、東京・千代田区の連合会館で、「日本の労働映画百選」の公開イベントとして、「日本の労働映画の一世紀」と題するパネルディスカッションを開催しました。

パネリスト:「労働映画百選選考委員会」メンバー

- 井坂能行(岩波映像顧問)
- 篠田 徹(早稲田大学教授)
- 佐藤 洋(共立女子大学講師)
- 清水浩之(映画祭コーディネーター)

司会:鈴木不二一(働く文化ネット理事)

ディスカッションでは、
 「どのようにして労働映画百本を選んだか」
 「日本の労働映画の一世紀—内容の拡張と質的発展」
 「労働映画が示す労働世界の広がり」これからの仕事と暮らしに労働映画はどう向き合っていくのか」
 など、熱のこもった討論が繰り広げられました。

参加者からは「労働映画の見方が変わった」「非常に刺激的なディスカッションだった」「選ばれた作品を見たくなった。どうしたら見ることができるのか」など、多くの関心と評価をいただきましたが、「時間が短すぎて、もっと聞きたかった」というご意見も出されました。
 (パネルディスカッションの様子は、改めて紹介したいと思います)

■ 記念映画上映「にあんちゃん」

パネルディスカッションの終了後、記念上映会として『にあんちゃん』を上映し、約150名の方にご覧いただきました。

この映画は、1959年の日活作品で、九州の小さな炭鉱町を舞台に、両親を亡くした4人の兄妹が懸命に生きる姿を、重厚なリアリズムで描いた作品です。
 (監督/今村昌平、出演/長門裕之・松尾嘉代 ほか)

「働く文化ネット」では、毎月第2木曜日の18時30分から連合会館で労働映画鑑賞会を開催しており、これが第29回目の映画鑑賞会となりました。



[DVD] ジェネオン

NPO法人 働く文化ネット 労働映画鑑賞会

【2016年7～9月期】 統一テーマ:働くこと、生きること、つながること

第31回 ～生きる希望としての学び～

上映作品:『こんばんは』(2003年/92分)【労働映画百選 No.79】

- ・開催日:2016年 9月 8日(木) 18:30～(18:00開場)
- ・会場:連合会館 201会議室(地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)

2016年7～9月期は、4～6月期に引き続き、「働くこと、生きること、つながること」を統一テーマとします。今回取り上げるのは、東京、墨田区立文花中学校の夜間学級で学ぶ17歳から92歳までの生徒たち、そして先生たちの学びの実践の記録映画です。映画のスタッフは撮影開始前に1年近く教室に通い、それから1年半撮影を重ねて、作品を完成させました。この夜間学級は、山田洋次監督の『学校』(1993年)の原点になったといわれます。ぜひ多くの方々に鑑賞していただきたいと思ひます。ご来場をお待ち申し上げます。

【プログラム】

- 18:30～20:05 上映
- 20:05～20:30 制作スタッフの方のお話を予定しています。

『こんばんは』(2003年/92分/カラー)

監督:森康行 構成:古賀美岐 撮影:川越道彦 プロデューサー:中橋真紀人
 《東京・墨田区立文花中で学ぶ 17歳から92歳までの生徒たち。
 教育の原点としての夜間中学の記録。》



【労働映画のスターたち】第10回「北林谷栄」 文：百永良武

半世紀かけて完成させた「おばあさん」という仕事



禍福 (1937)



ビルマの堅琴 (1956)



ビルマの堅琴 (1985)



キクとイサム (1959)



にあんちゃん (1959)



婚期 (1961)

「老婆といえば北林」とまで言われた、日本を代表する「おばあさん女優」。30代から老け役に取り組み、戦後日本映画の数々の名作に「母さん」や「婆さん」役として登場。舞台・テレビ・ラジオなど様々な媒体で、半世紀以上にわたり「老婆」であり続けた稀有な存在。その業績はあまりにも大きく、僅かな紙面にまとめることは到底不可能だが、「労働映画」の視点から女優・北林谷栄の作品を時代順に追っていくと、彼女がどのように「おばあさん」像を作り上げ、そこにどんな思いをこめていたのかが、ちょっとだけ見えてくる。残された膨大なフィルムグラフィーは、昭和の時代に様々な場所で生きた「名もなき庶民」の女性たちを、演技を通して「記録」し続ける仕事だったのかも知れない。

1911年、明治の末の44年生まれ。東京・銀座の洋酒問屋のお嬢さんで、本名は「安藤令子」。文明開化の赤レンガ街で育った、当時としてはかなりハイカラな生い立ち。後年専ら演じる役柄とは正反対に思えて興味深い。自伝的エッセイ集『蓮以子八〇歳』(1998年、新樹社)によれば、12歳の時に起きた関東大震災で家と店が焼け、彼女の「ふるさと」としての銀座は消えてしまった。また、震災の混乱の中で自警団に虐殺された在日朝鮮人の遺体を目撃し、その後もずっと「申し訳ない気持ち」を抱き続けてきたという。

その後、彼女は父方の祖母の隠居所に身を寄せ、ここでの祖母との生活が、後の「おばあさん」役の基盤となった。20歳の時に新劇女優を志し、創作座や新協劇団の舞台に立つようになる。

最初に出演した映画は、菊池寛・原作、成瀬巳喜男監督の『禍福』(1937)。ヒロイン・入江たか子が働く銀座の高級ブティックの先輩店員役で、築地明石町の洋風アパートに一人で暮らす、最先端のキャリアウーマン。北林が「若い娘」役を演じた映画は、後にも先にもこれ一本だけのような気がする。当時は26歳だから当然なのだが、その後のキャリアを知った目で見ると、「人に歴史あり」と実感させられる。

1940年、新協劇団は治安維持法により強制的に解散させられ、北林は宇野重吉らとともに、農文協直属の巡回劇団「瑞穂劇団」に参加。ここで共演者の宇野が強く勧めたことから、初めて老女役を演じた。30代に入ったばかりの彼女に、おばあさんの「素質」を見出したのは宇野であり、日本を代表する「おばあさん女優」は、戦時中の食糧増産奨励演劇から誕生したことになる。

戦後、1950年の劇団民藝創立に参加。幹部女優として活躍する一方、映画やテレビにも出演するようになる。『原爆の子』(1952/監督・新藤兼人)、『ビルマの堅琴』(1956/市川崑)、『オモ子と少年』(1958/森園忠)、『キクとイサム』(1959/今井正)、『にあんちゃん』(1959/今村昌平)など、数々の名作で「名もなき庶民」として生きてきた老婆を演じた。この時、北林はまだ40代だったことにあらためて驚かされる。

『ビルマの堅琴』では、抑留中の日本兵たちと片言の日本語で交流する、現地の物売り婆さんの役。1985年に市川崑監督がリメイクした映画でも、北林は全く同じ役で画面に現れる。両作品を比較してみると、70代で出演したリメイク版の方が、自然体に見えるのは言うまでもないが、オリジナル版の、なんとも不思議な「フィクション」をまとった老婆も、独特の味わいがある捨てがたい。

『キクとイサム』では、山里で混血児の姉弟を引き取って暮らすお婆さん。この時の衣装は、盛岡の朝市に花や野菜を売りに来た農家のおばあさんたちを見て歩き、「これだ!」と思った人をお願いして、身ぐるみ一切を新品と交換してもらったもの。北林の自宅には、こうした“生活の苦汁がしみこんだ”“生きたキモノ”が多数保管されていたそうで、ある意味「文化財」でもある衣装が、彼女が演技を作り上げる上での重要なアイテムとなっていた。

40代で「おばあさん女優」としてブレイクした北林。シリアスな作品のみならずコメディでも、いささかオーバーアクト気味な「婆さん」役で笑わせた。嫁と小姑のバトルに翻弄される婆やに扮した『婚期』(1961/吉村公三郎)などは絶品。《次頁へ続く》

野心的な作り手たちと挑んだ「おばあさん vs. 国家」

「おばあさん女優」の第一人者となった北林。その存在感に魅了された各界の作り手たちは、彼女を起用して野心的な企画にチャレンジするようになる。『キクとイサム』の監督・今井正、脚本・水木洋子のコンビは、北林とミヤコ蝶々という「東西二大老婆」の競演で『喜劇 にっぽんのお婆あちゃん』(1962)を製作。当時まだ注目されていなかった高齢者問題を、老年スター勢揃いで賑やかに描いた社会派喜劇が生まれた。

1960年に放送されたNHKラジオドラマ、小山祐士・作『神部ハナという女の一生』は、瀬戸内海沿岸に住むハナ婆さんが、老刑事(藤原釜足)の取り調べを受ける場面から始まる。彼女は戦前、9人の子供を産んで国から表彰された「母の鑑」だったが、子供たちは全員戦争から帰って来ず、夫も原爆で失い、戦後は原爆の後遺症に怯える妊婦たちのために、違法な堕胎を繰り返していた。お婆さんの「犯罪」を取り締まる役目の刑事は、再び核戦争へと向かいつつある世界情勢を眺めながら、どちらの「罪」の方が重いのか悩み始める。北林独特のとぼけた口調で淡々と語られる「庶民の人生」は、どんなに立派な演説でも敵わない、大地に根の生えたような力強さを発揮していく。このラジオドラマは1962年に戯曲『泰山木の木の下で』として書き直され、北林の舞台での代表作となった。

1970年の松竹映画『喜劇 あゝ軍歌』は、世相を諷刺した「重喜劇」で知られる前田陽一監督作品。戦没者を祀る「某神社」にやって来た老婆が、フランキー堺・財津一郎の戦友コンビから、実は息子は外ならぬ日本軍に殺されたことを告白される。老婆は「息子のための神社」を新たに作るかと、8月15日の「黙禱」の時間を悪用した賽銭泥棒計画を企む…という、いま見直すと数倍面白くなっているのが確実な物語。絵に描いたような「しわくちや」のお婆さんが嘆き、怒り、そして喜ぶ姿を、北林が楽しそうに演じている。

同じく1970年には、石牟礼道子のノンフィクションを基にしたテレビドキュメンタリー『苦海浄土』にも出演。RKB毎日放送のディレクター・木村栄文は、水俣病患者や遺族の思いを「そのまま」の形で映像化しようと考え、琵琶瞽女(ごぜ)に扮した北林が町を彷徨い、地元の人々と出会っていく構成にした。今で言うところの「フェイク・ドキュメンタリー」の手法で、チツソの社員が彼女を本物の瞽女さんだと信じ込み、お金を置いていく場面まで出てくる。虚実を交錯させながら世界の本質を掴み取るとする木村の試みは高く評価され、その後も三國連太郎、高倉健らを起用した斬新なドキュメンタリーを送り出していった。

山田太一のシナリオを北海道放送がドラマ化した、東芝日曜劇場『終りの一日』(1975/演出・甫喜本宏)は、北海道の漁師町で中学教師を続けてきた戦争未亡人が主人公。アツ島の戦いで夫を失い、30年以上独り身だった彼女は、「物音一つ立てるのにも周りに気を遣って生きてきた」自らの人生を振り返る。当時60代の北林にとっては「実年齢より若い役」という珍しい作品。

1970~80年代は上品な「おばあさま」といった役柄が次第に多くなり、映画『華麗なる一族』(1974/山本薩夫)では首相夫人まで演じるようになったが、銀座生まれの彼女のこと、むしろ自然に演じている感じが、見ていて好ましかった。

そして1991年、岡本喜八監督の映画『大誘拐 RAINBOW KIDS』で、和歌山の山林地主・柳川とし子刀自を演じ、数ある「老婆」役の集大成的な作品となった。82歳の「大奥様」が3人組の誘拐犯に囚われるが、彼女は犯人たちに身代金100億円という法外な要求を出させ、自ら指揮をとって犯行を進めていく。犯人と身代金はきれいに消え、刀自は無事に戻ってきたが、あまりにも周到な計画に疑問を持った県警本部長(緒形拳)は、首謀者は刀自だったことに気づき、彼女に動機を尋ねる。ここからのひとり語りは、『神部ハナという女の一生』にもつながる北林の独壇場。「お国って、私にはいったい何やったんや」と呟く刀自の言葉は、昭和の時代に「お国」に翻弄されてきた「おばあさん」たちの声となって、後に続く世代に貴重な教訓を与えてくれる。

国民的アニメ『となりのトトロ』(1988/宮崎駿)、90代に入ってから『阿弥陀堂だより』(2002/小泉堯史)、『黄泉がえり』(2003/塩田明彦)など、まだまだ取り上げたい作品はたくさんあるが紙面が尽きた。2010年に98歳で旅立たれた女優・北林谷栄さん。願わくば、現存する出演作品を集めた「北林谷栄映画祭」をどこかで開催してほしい。彼女が演じ続けた「庶民」像こそ、20世紀の文化そのものという気もするのです。



喜劇 あゝ軍歌 (1970)



苦海浄土 (1970)



終りの一日 (1975)



大誘拐 (1991)



黄泉がえり (2003)